

生活を豊かにするためのデザインを追求する

デザイナーの専門性と社会的責任

デザイン・建築学系の中坊壮介准教授は、プロダクトデザインを専門としています。2015年には、ドイツの権威あるデザイン賞「iF Design Award 2015」にて、金賞を受賞しました。受賞作の電池式掃除機「プラスマイナスゼロ コードレスクリーナー Y010」は、本当に必要とされている機能をシンプルに磨きあげた掃除機として評価されました。中坊先生は、「製品デザインの場合、デザイナー自らが賞に応募することはあまりありません。メーカーなどが費用対効果を考えて応募するので、出してもらえたらラッキーです。今回、何よりも嬉しかったのは、大学の先生方や職員の皆さん、学生に喜んでもらえたことです。」と言います。

中坊先生は、「デザインは、基本的には生活を豊かにしてくれるもの」と語ります。「デザインは、非常に広い範囲を担え、何でも対象となりますが、私自身はプロダクトデザインに拘りをもっています。製品の場合、何万個と世に出るので、責任が重大です。世の中に出してはいけないものや、不要になるようなものは作らないよう日々気をつけながら、自らの専門性を高めるようにしています。専門性と責任感是一体です。」中坊先生は、プロダクトデザインの専門性のありかとして、素材・材料に対する知識を挙げます。「例えば、アロマオイルを入れる容器において、プラスチック（樹脂）でガラスのような透明感を実現した際には、オイルと樹脂との

相性が悪いと、樹脂を溶かしてしまう恐れがあります。問題のないPPという樹脂もありますが、それは白濁しており、透明感が出ません。そこで、徹底して調査して、実験の理化学機器で、樹脂でできた透明のピーカーを見つけました。TPXという樹脂ですが、これであれば使えることがわかり、透明感を実現できました。そうしたことの積み重ねが、プロダクトデザインです。」

デザインにおいては、イメージや機能性、あるいはコストなど、多様な課題に応えることが必要になると中坊先生は言います。「製品『ステンレスボール』では、実は底を少しだけ反らせています。ボールがくるくるまわってしまうのを避けるため、素材の特性を踏まえて絶妙に曲げるわけです。また、共にステンレスボールを制作したブランドは、消費税が8%になっても値段を据え置くことを宣言していました。そのため、安く作りつつ従前以上の価値を出すということが、私の課題でした。この製品は何種類かサイズがあるのですが、従前のものは、それらを重ねることができませんでした。それを改良し、重ねて梱包できるという価値を生み、流通コストを一気に下げることに成功しました。」

新しい時代に沿った質の高い デザイン人材を育成する

中坊先生は、京都市立芸術大学を卒業後、企業での勤務と留学を経験しました。その後、その経歴を活かしてロンドンのデザイン事務所で勤務、2009年に帰国して独立しました。「独立するまでは、企業ブランド等のテイストに沿っていればよく、自分が考えるデザインの説明は不要でした。しかし、独立した途端にあなたは何者なのですかと問われ、説明する必要ができました。幾つかの大学で非常勤講師として勤務したこともありましたが、その経験が言語化する際の役に立ちました。その後、2014年6月に本学に着任しました。」

中坊先生は、本学の特色を次のように指摘します。「他大学と異なるのは、デザイン分野がグラフィックデザインやプロダクトデザイン等、縦割り構成になっていない点です。多様な学生が切磋琢磨しあえて、柔軟な基礎力と広い視野を身につけることができるので、とてもよいと思います。社会でも、分野区分を超えたところでのデザインの必要性が増しており、本学の方法は、新しい時代に沿った人材を育成す

るうえで非常に有意義であると思います。その反面、特定の分野をずっと学び続けることで培われる強さもあります。その点で、縦割り構成でないことの弱さが出てしまう場合もあります。それをどう補っていくのかが、今後の課題です。また、美術大学の受験生は、デッサンを追求するなかで頭を悩ます経験を多かれ少なかれしています。デッサンは目の対象と対峙しながら、自問自答する営みです。本学の学生にも絵を描ける学生はいますが、比較的そうした経験には乏しいと思います。私が着任することで、美術大学の雰囲気も伝えられればと思います。」

本学には、平成26年度に建築・デザインを軸に社会変革をめざすKYOTO Design Lab (D-lab)が発足、海外の大学から研究室を招致しワークショップを開催するなど、国際性豊かな取組を行っています。中坊先生は、D-labの意義を次のように語ります。「様々な国から教員や学生を迎え入れるD-labは、他大学には類例がないもので、本学特有のものです。家具なども含めた製品全般で考えると、やはりデザインの本流はヨーロッパです。脈々と受け継がれてきたものづくりの文化があり、そこに追いつけ追い越せというのは一朝一夕にはいかないと思います。私も本場のデザインに触れたいという一心で、イギリスに留学した経験があります。本学の学生は、D-labがあることで、京都にいながらにして留学しているようなものです。ぜひ、この環境を活かして欲しいです。」

ものづくりの原点に戻り、 価値あるものを自ら発信する

中坊先生は、今後の抱負を次のように述べます。「これまでの仕事はクライアントがいて成り立つ請負のもので、自発的にこういう物が欲しいという形では、デザインができませんでした。子供の頃、私がものづくりや絵を描いたりしていたのは、欲しいものを自分の手でつくるためでした。自分の理想とするものが手に入らないときは、自分で創造するしかありません。これが、私のものづくりの原点です。その原点に戻って、単に要望にあわせてつくるのではなく、自分が価値のあると思うものを、自分自信が発信してつくっていききたいと思います。まずマーケットありきという考え方で、多かれ少なかれマーケットに迎合することになってしまいます。社会はこうあってほしいという理想からものをつく



デザイン・建築学系
中坊壮介准教授

ると、根本的に違うものが作れるのではないかと思います。例えば、消費者がものを選ぶ時、同じ機能であればより安価なものを求める結果、最近はその値段がどんどん安くなっています。しかし、それが本当に欲しいものなのでしょうか。10年、20年と使い続けられるものかということ、はなはだ怪しいものも多いです。本当によいものが手に届く価格で売られていれば、多少高価であっても、そちらのほうが良いという考え方もあるはず。より豊かな生活は何なのかを考えながら、価値あるものをつくっていきたくて考えています。」



無印良品 ステンレスボール・ザル、
プラスマイナスゼロ アロマディフューザー V110



プラスマイナスゼロ コードレスクリーナー Y010